

# 図書館から 岸和田ルネサンス 第9号

発行 岸和田市図書館友の会

## 短歌・詩・俳句で語る コロナ禍の「新たな日常」

今回は、図書館友の会の短歌・詩・俳句の各教室の皆さんの作品です。それは、コロナ禍の中で変容した「新たな日常」におけるつぶやき？…。ゆっくり読めば、「うん、うん、わかる、わかる…」と、あなたも思わずつぶやきたくなるでしょう。

それも「歴史の証言」の一つかもしれません。「そんな時代もあったねと、笑って話せる日」が、一日も早く来ることを願いながら、互いにつぶやき合いましょう。

発行 2020.12.27

コロナ禍に逢えず過ぎ来し施設の友を携帯よすがに安否を思う

藤田 和美

スマホ動画に京住みの孫の現われて盆の読経に加わりにつけり

永原 テル子

突然の一斉休校明けし後孫は過密の部屋に通える

西村 智子

コロナ菌悪神なれど「自然との対話忘れし」ヒトに諭せし

西田 幸子

陽春の秋篠音楽堂コロナ禍にブリリアント・コンサート中止となりぬ

杉村 チヅ子

コロナ禍のマスク生活口紅を引かぬ化粧の半年を経る

マスクとり佇む路地の甘き香に薔薇の盛りに気づくコロナ禍

長谷川 美栄子

「三密」はいけないだから外に出てさわろう土を草を思いきり

世界一の戦闘機もつ国あれどコロナを負かせず感染者増す

尾崎 けい子

雨の中やつと着いたる駅の椅子ソーシャルなんとか馴染みなき語よ

野本 富喜栄

中年の気迫あらわるマスク顔防御のマスク老いたる我も

森 恵子

幼児もマスクを着けて神妙に何処に仕舞えけり日頃のやんちゃ

皆見 真砂子

始まりは何処とも知り得ぬウイルスに百万余の命奪われし地球よ

佐々木 久仁子

二〇二〇年 春〜初夏

青野 潤子

ジム通いも躊躇われ始めた公園散歩

まだ桜はつぼんでいる 昼下がりの陽ざしは快い

静まり返った校舎を横に公園へと歩いていく

老若男女のジョガー ウォーカー

ベンチに腰掛けてしていると 大正琴 ギターなどの音が耳に

入ってくる

所々 人が集まり話している

少年たちはラップを流し スケボーに興じている

満開になるころには シートを広げた家族連れやら若者た

ちが しばしの開放感のなか笑い声も聞こえてくる

入学式もない ランドセル姿も制服姿もない四月の町

緑眩しく五月が咲くころには 涼風の吹く夕方の散歩

トイプードル ミニチュアダックスフンド チワワ 柴犬

フレンチブルドッグ イタリアングレーハウンド ゴール

デンレトリバー 品評会さながら ワンちゃんたちもご機

嫌よく

時々友人と一緒に歩く

朝であったり 夜であったり 唯一の社交の時間横並びマスク越しの会話

このウイルスって老人狙い撃ってるみたいね

高齢化社会だもんね ふふっ 私たちも老人だわ

でも日本はBCG打ってるからまだ感染少ないんじゃない

キスもハグもしないしね

子供達かわいそうね

私たちですら外出できなくて 誰とも会えずストレスいっぱい

いなのに 九月入学どうなるんやろ？

アベノマスク届いた？ 小さいし 今更ね

店頭で溢れかえってるやん ほんま税金の無駄使いやわ

いつになったらまた旅行できると思う？

秋くらいには車で近場の温泉とか せめては孫に会いたいな

来年のオリンピックは無理やろな

バラが咲き誇るころ

すっかり今の生活リズムに慣れてしまったわ

だらりんと間延びした毎日が心地いい

もう元には 戻れないかもね

アジサイも咲き始めもうすぐ梅雨ね

散歩できなくなってしまうたらどうしよう

詩三題

西山光子

彼岸

蕾がふくらんで  
満開はもうすぐ  
花の樹を背にした墓石  
真つ青な空に一羽の鳥  
ゆうゆうと舞う  
いい天気だ  
見えない敵に怯え  
ふりまわされて  
もうごめんだよ  
こんな春の訪れを  
誰が予測しただろう  
今日は彼岸の中日  
ため息ついて  
そつと合掌  
南無阿弥陀仏

これは：

例会もコーラスも  
ふれあい活動も  
みんなみんな  
延期中止のそろい踏み  
終日家に閉じこもり さて  
嘆いていても日は過ぎる  
おや 柵の隅から手招きする  
『熊澤友雄（賢徳）日記（一）』  
市史の研究会で頂いたまま  
埃を払ってページを繰る  
編者Y氏の穏やかな笑顔  
優しい声が懐かしい  
天保二年〜明治二十八年を生きた  
岸和田藩士の赤裸々な記録  
殿様に仕える喜びや気苦労  
細やかな日常の暮らし  
激動の維新を乗り越えた英知  
賢者の声が聞こえてくる  
新型コロナウイルス  
感染の怖れが付きまとい  
先の見えない苛立ち でも  
来る日来る日に招いてくれる  
両手に溢れる至福の時間  
これは：

待つ

今日も  
ひとり歌っている  
心のうたを歌っている  
春を 夏を 今は新涼  
秋の譜を並べる  
旅愁 故郷の空  
紅葉 小さい秋みつけた  
村祭り 里の秋 野菊  
メールだ  
「どうしてる？」  
「早くいっしょに歌いたい」  
「三密の最たるもの 悔しいね」  
コーラスは我が人生の潤滑油  
冴えない声でひとり歌っている  
ハーモニ―を楽しむ心は  
日に日に錆びついて  
ただひたすらに  
大きな歓びの時を待つ  
新型コロナウイルスよ  
お前はとてつもなく残酷だ

## 茅渚俳句教室の作品

2020年、私たちは新型コロナウイルスによるパンデミックを経験。「新しい生活様式」を強いられるようになり、今までの普通の暮しが一変しました。そして今、withコロナの時代を生きています。1月から11月までのコロナに関する俳句を振り返ってみると、やはり季節の変化が感じられます。(4月5月は開催できませんでした)

### 【一月】

春節やコロナウイルス空を飛ぶ

朋代

### 【二月】

梅見頃花粉とコロナに悩まされ

和子

春疫病風評被害の市町村

久美子

### 【三月】

不安の世季節違はず木の芽かな

恭子

春霞コロナの終りまだ見えぬ

みどり

無観客どのスポーツも三月尽

種子

コロナ禍にさわぐ街中初桜

久美子

### 【六月】

コロナ禍にコーラス解散梅雨に入る

郁代

コロナ禍で紫陽花寺が遠くなり

好子

気晴らしに紫陽花色の服を買う

朋代

家ごもり窓のむかうに揚羽蝶

久美子

自粛解けノーネクタイで出張す

みどり

久に聞く園児等の声梅雨晴間

種子

### 【七月】

肉食みて大暑乗りこえ明日も良し

好子

感染増え夏の旅行も取り止めに

みどり

コロナ禍でリモートワークの大暑かな

種子

なめくじり動きに不用不急なし

舜平

大暑なりコロナウイルスつきまとふ

朋代

コロナ禍の果ての見えざる大暑かな

寿美

コロナには負けじと食す土用うなぎ

久美子

### 【八月】

コロナ禍に危険な暑さ引き籠る

乙淡

わが思考まとまり難し秋の声

澄子

お盆にも家族の顔はリモートで

みどり

今日は何人コロナ禍思ふ秋の声

好子

予期せず願ふ間もなく星流る

恭子

朝まだき秋声聴きし遊歩道

寿美

気怠さの中で安らぐ今朝の秋

舜平

### 【九月】

身に入むやどこへ行ってもディスタンス

乙淡

プログラム変はる今年の運動会

みどり

コロナ禍に急のころ草は首をふる

郁代

一日を芋虫ゆつくりゆつくりと

舜平

### 【十月】

何事も気付かぬままに冬隣

澄子

月をみて会えない人と語りあふ

みどり

すこやかな友の来遊柿熟るる

郁代

女子会もいつになるやら冬近し

種子

マスクにも馴れて微妙な秋の暮れ

朋代

ひとりごと言ひて笑ひて冬近し

茂

廃業の店跡広し秋の風

久美子

### 【十一月】

はや霜月この一年は無念なり

好子

炬開や炭と茶の香もマスク越し

寿美

世の愁い暫く忘れ神楽月

茂